

推薦の言葉

肺の局所解剖は、肺切除がさかんに行われ始めてから区域解剖という立場で再検討されました。そしてその知識をX線あるいは内視鏡診断に応用することによって、肺癌を中心とする呼吸器疾患の診断や病態の把握がより正確になってきています。さらに最近ではCTの出現に伴って、びまん性呼吸器疾患の病態解析の1つの方法として肺の末梢構造の局所解剖が見直されつつあります。

このように、臨床医学の進歩につれて、それぞれの臓器あるいは組織のどこにどのような病変が生じ、どのように進展あるいは退縮するかを知る必要が生ずると、その目的に沿って局所解剖の再整理が求められ、その結果が画像診断や治療法の進歩などに還元されることがしばしばあります。

けれども、局所解剖学的な事実を十分記憶に止め有効に活用して行くことは、とくに初心者にとって容易なことではなく、肺の区域解剖についての知識もその例外ではありません。

今回、周東 寛君がこういった問題を解決するための試みとして、気管支体操という発想を出されました。それは、簡単な番号あるいは記号で表される気管支（同時に肺血管）の命名の順序（上→後→…）と方向とを体操化したもので、肺の区域解剖の基本を身につけたり思い出したりするのに大変有効だと思います。

周東君は、昭和大学医学部藤が丘病院で野口英世教授の御指導をうけられるかたわら、短期間（昭和55年10月～昭和56年2月）ですが札幌にも研修に来られた大変熱心な若いDoctorです。御自身の体験に基づいて編み出されたこの気管支体操が広く普及し、肺の局所解剖ひいては診断などについて多くの方々の御理解を深めることに役立つことを期待します。

1984年4月

元札幌医科大学第3内科教授
鈴木 明

この推薦文は84年4月初版『体操で覚える
気管支分岐』を作成した際に頂きました。

この本を推薦します

医師とはいつも自分が学べる丈の医療の事実を知るべく勉強し、人格をみがき、どんな病人が、どんな病状の人が目の前にあらわれても、勉強の成果を応用して、何とかしてその病悩を解き、やわらげられる心のもちようと教養をもたなければならない。その中に病人が双手を上げて結果を喜んでくれるような場がえられればえられる程、その勉強と修養の成果が現われ、名医に少しずつ近づく。

医師が情熱をそそぎこんで征圧しようと努力する歴史の中に、肺癌については河合直次、篠井金吾、石川七郎の三大先達につづいて情熱を傾け、肺癌征圧に立ち向かった友人達の中に、我等の尊敬、敬愛してやまない池田茂人君が育ち、我々の進むべき道を強く照した。

気管支ファイバースコープであった。

あまたの学者の居る中で、周東 寛先生は、気管支の解剖、走行を自身の体操の中に“周東体操で覚える気管支の位置”として立体的に会得する方法を確立した。更に肺の血管、リンパ節の走行、部位、多層CT・MRI画像診断、胸部CT画像の詳細な部位読影の解説、センチナルノード解析が周東診断法を更に難しい領域の病態解析を診療に役立ててもらうのを人々は待っている時代である。

池田茂人君も今、あの世で、透視台の上にて、周東体操の池田茂人変法をものにしようと眉を吊り上げているにちがいない。“なに負けるものか！ Never give up！”と。

2004年1月 吉日

国立がんセンター 名誉総長
東京都済生会中央病院 院長
末舛 恵一

この本を推薦します

私はこの周東 寛先生の独創性に満ちた本を拝見していて、感心すると共にある種の懐かしさの様なものを感じました。と言うのはこういう訳です。私は昭和31年名古屋大学医学部第一内科の呼吸器研究室に入局いたしました。当時一年先輩の鈴木 明先生、島 正吾先生がおられ、仕事の合間をぬって一緒に入局した7人の同僚と共に、赤・白・青のビニールカバーされた銅線を使って肺の気管枝・血管系の模型造りを教えて頂きました。そのよき時代を思い出したからです。それがその後の臨床にどれだけ役に立っているか知りません。

平面化された胸のレントゲン写真を見る時に立体的な肺の気管枝や血管の構造を頭の中にえがきながら見ることは、その後勉強した切除肺の病理標本とレントゲン写真との対比読影と共に、レントゲン写真を「見る」のではなく「読む」という作業に欠かせないものとなりました。医療が細分化、先端化され更に医師が忙殺されている現在、これらの基本的な訓練がいまは行われていないのではないのでしょうか。これは私がひそかに心配している事でもありました。その意味で、この本の基本的でしかも分かりやすい内容は貴重なものだと思います。しかもそれらの内容が最新MRI画像も加え、肺のリンパ系、CT画像にまで及び進歩した現代医学に対応しています。呼吸器を担当する医師の手にする入門書として推薦に値するものと確信いたします。

それだけではありません。進歩した現代医学は医師のみならず、看護師、検査技師等と医師が一体となって支えなければ成り立たないものとなっています。その意味で分かり易い本書はこれらの方達、特に放射線技師の方にも是非手にして頂きたいと思います。

もう一つつけ加えて申します。私共の話になりますが、日本気管支学会中部支部が2002年7月 気管支鏡検査のためのガイドブック『気管支鏡所見の読み』とビデオ『気管支内視鏡検査の手技』『画で見る気管支鏡所見ケーススタディ』を出版いたしました。これは気管支鏡所見を「見る」のではなく「読む」、それも病理学的所見を念頭におきながら読むことを目的とした、納得できる本として評価を頂いておりますが、今回の周東 寛先生の本書が私共の出版した本の入口に位置する貴重なガイドブックであると考えられ、改めて推薦させていただきます。

2004年1月 吉日

県立愛知病院 名誉院長
日本肺癌学会 名誉会員
日本呼吸器内視鏡学会 名誉会員
『気管支鏡所見の読み』編集委員長
西村 穰

この本を推薦します

この本は「これを知れば呼吸器の診断が楽になる」と付けられていますが、本当は「これを知れば呼吸器の診断が楽しくなる」が正しいタイトルでは無いかと思います。

自分の体を縦隔や気管支に見立てて、気管支や血管、リンパ節の走行や名称を体操で覚えるという、まさに「体で覚える」ことを教えております。自転車や水泳なども「一度体で覚えたことは忘れない」といいますから、胸のX線写真やCTを読むことがある医師は、是非全員この体操を通じて解剖をマスターし、楽に、楽しんで読影してほしいものです。ただし余り楽しむと読影が遅くなりますので、くれぐれも楽しみすぎないようにご注意ください。

敬愛する周東先生が、今までの研究成果をまとめる本を出されるというお話は聞いておりました。しかし、なにしろ先生は臨床活動や研究の他、新たな施設の建設、患者さん方との交流、クリニックの廊下や待合室を飾る油絵や詩の作成など、寸暇もないほどご多忙です。出版も遅れるのではないかと懸念しておりました。ところが本日、印刷するばかりになった原稿が届き、その早さと美しさに驚かされました。これも肺の病気に苦しむ患者さんを一人でも多く救いたいという情熱の現れと思われまます。

周東先生は、気管支鏡を開発した池田茂人先生を大変に尊敬しておられ、池田先生がご病気で退官されてからも種々の治療機器をわざわざ中国から取り寄せ、ご自宅まで持参されていらっしやいました。これも池田先生と周東先生の熱い情熱がお互いに通じあっていたためにできたことと思います。

この本を開くことで、周東先生と先生を支えてきた池田先生を初めとする高名な先生方の情熱に触れることができます。一読ならず、何遍も読み直して、明日からの臨床や研究に役立てていただくことをお勧めします。

2004年1月 吉日 国立がんセンター 中央病院
内視鏡部 医長
胸部CT検診研究会 会長
金子 昌弘